

研修成果報告書

9月1日から3日までの日程で、秋田県藤里町におけるボランティアを行った。私たちは普段八王子市内にある特別養護老人ホームやデイサービスにて月に3回程度の傾聴ボランティアを行っている。藤里町でのボランティアは夏と冬、年に2回、今では10年を超えて継続されてきた行事であり、高齢化が著しく進行し、若者の少ない藤里町では、私たちの訪問を心待ちにしてくれている方も多く、藤里町社協のホームページや新聞等にも例年取り上げられており、恒例行事となっているといっても過言ではない。

藤里町の研修において、社協が運営するグループホーム「ぶなっち」、デイサービス、「元気の源さんクラブ」、グループホーム「美里園」にて傾聴ボランティアを行った。

「ぶなっち」では、現在6人程度が生活をしている。昨年度の冬に私が伺った際には、全部屋が埋まるほど多くの方が入居されていたため、入居者が減少した理由を社協職員および入居者の方に伺ったところ、秋田県は豪雪地帯で、冬季における北部は雪によって孤立地帯と化してしまうため、特に一人暮らしの高齢者は北部の自宅で生活が出来ないという。夏の間は雪もないため、問題なく生活が出来るため、北部で一人暮らしをしている方であっても自宅で過ごしているとおっしゃっていた。東京都などの都市部であると、近所付き合いが少なく、よくニュースなどでも一人暮らしの高齢者の孤独死が問題として取り上げられている。反対に、藤里町はいわゆる田舎町であるため、悪く言えば監視願望が強く、見知らぬ人間が町を歩いていると誰だろうかという目線を感じたり、噂が立ちやすく、私生活が筒抜けになってしまうということもあるが、良い面から見れば、一人暮らしの高齢者の方の具合の急変等にいち早く気づくことができ、いわゆる見守りネットワークが充実していると言える。こうした見守りネットワークは、現代都市部において欠乏傾向にあるものであり、特に高齢化の進んだ地域においては重要な要素である。

デイサービスにおいては、毎日のプログラムである体操に参加、傾聴を行った後、利用者の方々と三グループに分かれ、輪投げなどの軽い身体運動を含む活動をするグループを二組、大きな模造紙に秋の味覚などを折り紙等で作成して貼り付けるといった工作をするグループを一組構成し、別れて活動した。体操は昔の歌謡曲に合わせて作られており、利用者さん方は歌を口ずさみながら体操をしていた。しっかり振り付けを覚えて体操をされている姿から、利用者の方々にとってこの体操はルーティン化しており、また、昔よく歌っていたという歌謡曲を元にする事で、若い頃からの長期記憶を上手く生かしていると感じた。また、全員で同じ歌を歌い、体操をすることで、デイサービス全体に一体感が生まれ、より交流を深められる。私は工作のグループに所属したが、のりやテープなどを使い作業することによってIADLの低下防止や、大きなテーブルを複数人で囲み同じ作品を分業することによって完成させていく過程において達成感が感じられ、有能感の向上に繋がるように感

じた。このデイサービスで傾聴をしている際に、幼馴染であったり、学校の同級生同士であったりという利用者の方々の話をよく聞いた。生まれの場所から引越しなどせず、生涯地元で生活するという話を、藤里町では東京での活動より多く聞くが、これは一種の閉鎖性であり、それゆえに若者が新しくこの土地に入ってくるのが困難であるという高齢化の要因もあるだろう。

「元気の源さんクラブ」とは、藤里町社会福祉協議会が運営する、毎週水曜日地域に住む60歳以上の方々が集まり、自分が選んだ好きなプログラムで介護予防を行うものである。この日は秋田県看護福祉大学からの実習生の方もいらしており、実習生考案のプログラム二点が行われた。初めのプログラムでは俳句作りをおこない、源さんクラブの方々と共に最近あった出来事を考え俳句にし、発表した。最近の出来事を思い出すという想起の過程、またはそれを俳句の文字数に適した形にするという過程において、脳を活性化できるプログラムだと感じた。二つ目のプログラムでは、民謡を踊った。やや高度な踊りであったが、最後全員で踊り切った際の達成感は大きかっただろう。踊ったことのない新しい踊りを覚えるという過程と、覚えた踊りを思い出して踊るという過程を組み合わせた、介護予防に適したプログラムであった。

グループホーム「美里園」では、2時間という短い時間ではあるが、主に傾聴を行った。私が「美里園」で出会った方の中に、耳がほとんど全く聞こえない方がいたのだが、職員の方にホワイトボードを貸していただき、筆談での交流を図った。その方は耳は聞こえないものの、認知機能は大変高く、また手先も器用で大変きれいな字を書く方であった。そこで私は、要介護度の設定方法に疑問を抱いた。同じ要介護度でも、認知機能が低く認知症が進行しており、身体機能が優れている方と、認知機能は高く認知症もほとんど進行していないが、体が不自由であったり目や耳など身体機能が低い方がいるが、そうした方々を同じ要介護度の高齢者としてひとくくりにとまとめてしまうのは、双方にデメリット等はないのだろうか。特に私の出会った利用者の方のように、身体機能は低いが認知機能は高い方がその反対の方と1日中一緒に過ごしていたとして、精神的に落ち込んでしまう、思うように会話などのコミュニケーションが取れないことによる孤独を感じてしまうことが多いのではないだろうか。これは八王子市内の特養においても感じたことのある疑問である。「美里園」はグループホームであるため、そもそも入居されている方は自立できる生活レベルではあるが、特養であれば要介護度3以上、認知症は進行しているはずである。「美里園」では冬に比べ認知症が進行している利用者さんもいらっしやしたが、その方のフロアも変更されることなく、要介護度の低い方高い方関係なく住み慣れた環境で生活しており、環境の急激な変化によって大きく影響されてしまう認知症の方に適したシステムだと感じた。「美里園」を去る際、筆談の女性は涙を流して別れを惜しんでくださり、こうした私たちの来訪を楽しみにしてくださる方一人のためだけでも藤里町を訪れる意味があるのだと痛感させられた。

今回藤里町を訪れるにあたって、昨年度の冬に訪れたときよりも深く地元住民の方々と

の交流を図り、人と人とのつながりを深めることを個人的な目標としていたが、実際に昨年度以前の訪問でさえも覚えていてくれる方が多く、また新たに出会えた方もおり、たくさんの方の絆を生むことができた研修であったと感じる。長年の訪問で築いてきた信頼があるからこそ聞ける本音の悩みなどもあるだろう。また、見守りネットワークが充実した藤里町のシステムを目前にして、改めて少子高齢化が進んだ現代で設備されるべきだと実感した。今後藤里町でこうした活動を継続して行っていくことで、優れた福祉の制度を学び自らの糧を築きつつ、若者の少ない地域において私たちの若いパワーを届け、藤里町の高齢者の方々に非日常的な空間を楽しんでいただくことができたらと望んでいる。